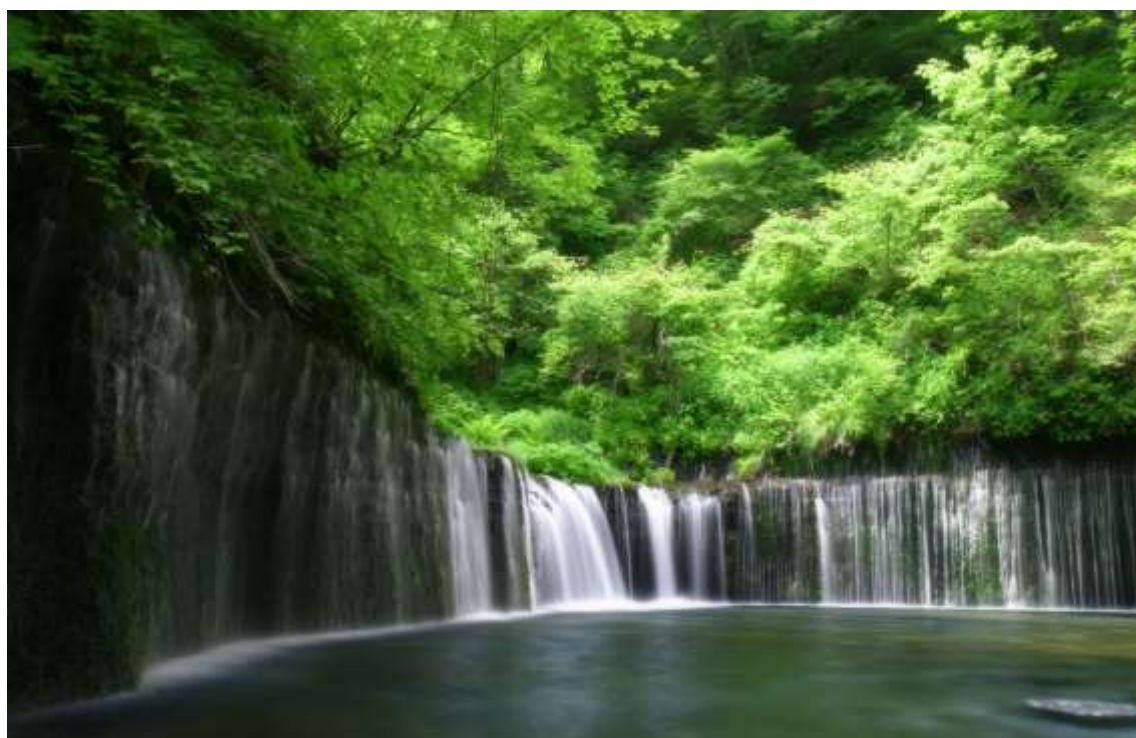


ナイアガラタイムス

2021年6月1日 第6号

人 力 夢



目次

美味しい話⑤	黄金焼の話	・・・2
シネマ滝⑤	「のど自慢」1999年1月公開)	・・・3
THE極み	どこやショップ シュガー 佐藤吉美さん	・・・4
名盤探検	荒井由実「ひこうき雲」	・・・7

美味な話⑤「黄金（おうごん）焼の話」

このコーナーでは、今まで肉・魚・魚・肉と続いたので、今回は甘い物にしようと思った。

甘い物について、なにが書けるかと考えてみた。先日テレビで特集していたコメダ珈琲店の食べた事がないシロノワールについて書いてみようかと思った。けれど、それじゃあ、ただの宣伝にしかならない。ここでは思い出の味を書きたい。思い出の甘い物。それはなんだろうと考えてみたら、黄金（おうごん）焼だった。

甘い物が好きだった父親は、結婚した頃から、仕事帰りにまんじゅうとか、ちょっとした食べ物を買ってくるくせがあった。退職間際、3年ぐらい勤めていた新百合が丘の時には、自分があんパンを食べたかったからだろう。よくHOKUOの菓子パンをよく買ってきてくれた。滝は中でも、カマンベールチーズが入ったくるみパンが好きだった。今でも近くを通ると食べたくなるぐらい、父親のこの「くせ」は滝の中にしみこんでいる。

滝の実家のある二俣川の駅には黄金（おうごん）焼の店があった。駅ビルに入るだけで、その匂いがしてきたような気がした。最近までの事だと思ったら、25年前にはなくなっていた。

滝の家族は、みんな黄金（おうごん）焼と呼んでいた。けれど今、調べてみたら、小判の形をしているから「黄金（こがね焼）」と60年ほど前に命名されたらしい。これは知らなかった。

滝は翌日のカレーではないけれど、翌日の黄金焼が好きだった。朝パンを焼く時、パンの横に黄金焼を置いてトースターで焼くと、皮がパリパリになり、それが好きだった。天ぷらの時も、鍋に入れてもらって揚げて食べる事もあった。

18才の夏の事。おふくろが天ぷらを揚げている時、横に黄金焼があった。いつものように「これもついでに入れて」と言った。そしたら、おふくろは何を思ったか、トースターを出してきて焼いた。エアコンもついていたのでブレーカーが落ちて真っ暗になり大騒動。その時、「人に、なにかを頼む時ついでにとは何事だ」と激怒され、それ以来「ついでに」という言葉は使わなくなった。

この黄金焼、今も横浜の追浜に売っているらしい。今度、買いに行ってみようかな。



シネマ滝④『のど自慢』（1999年1月公開）

この映画は、桐生という町でNHK「のど自慢」が開催されるまでの3日間を描いている。まるでジグソーパズルのように、小さなエピソードがいくつも集まり最後には見事にひとつの物語になっている。見終わる頃には、本当に人って様々な人生を背負って生きているんだなあとしみじみ感じさせてくれる、そんな作品である。

売れない歌手、赤城（室井茂）が営業で地元に戻ってきた。実家に寄ると、偶然よその親子ゲンカに出くわす。その時一枚のハガキを拾った。それが「のど自慢」のオーディションの出場券だった。

歌手志望の女子高校生は、姉が恋人と駆け落ちすると聞き、そんな姉に向けて歌うために。一方、荒木（大友康平）は自分がやっていた飲み屋が火事になって、40歳にして余儀なく人生をやり直す事になり、オーディションと同じ日に焼鳥チェーン店の試験を受ける事になっていた。町はのど自慢一色。カラオケボックスはどこもいっぱい。

赤城はオーディションの受付の時、女子高校生に無理矢理、歌を変えさせられる。赤城が歌おうと書いたのは喜納昌吉の「花」、それを目にして女子高校生はテレビの向こうの姉に歌いたくなったのだろう。岡本真夜の「トゥモロー」を歌う事になってしまった赤城は仕事を放り出し「トゥモロー」のCDを探し出し、初めて大勢の人の前で歌うために練習。荒木は、焼鳥チェーン店の試験を受けながら家族がオーディションの順番を待ち、尾崎貴世彦の「また会う日まで」を歌い上げる。

みんな目指すところは同じ、日曜日のお昼のステージ。果たして当日の結果は。

当日の「のど自慢」は、もちろん大盛り上がり。赤城は「トゥモロー」を歌い、合格の鐘を鳴らし、涙。荒木は歌っている最中に焼鳥チェーン店の合格が決まったと家族からのサインで知り調子を崩し、鐘ふたつ。そして映画は、おじいさんが歌う「上を向いて歩こう」で終盤へと向かっていく。

映画の内容を紹介してみたが、これはほんの一部。本当に小さな物語がてんこもりの映画なのだ。ぜひ、配信でもレンタルでも、一度チェックを



今回の極みは、相模原市中央区弥栄にある「とこやショップ シュガー」の佐藤吉美さんに取材させて頂きました。さて、どんなお話しが伺えるのでしょうか。

the 極み

滝：何故、理容師になろうと思ったんですか。

佐藤：なにしろ16～7の頃から、自分の髪の毛をいじるのが好きだったし。それに、人の髪の毛というのは必ず伸びるから、それを職業にすれば将来的に安定するのかなと思ったのがきっかけかな。

理容学校は綱島にある学校の一期生。自分でなろうと思ったから、親に迷惑かけたくないと思い時給が当時80円だったレストランでアルバイトをして学費を稼いで学校に通った（今は理容師になる人が少なくなってきたから、その学校があるかどうかは分からないけれど）。そうやって頑張って、一日でも早く自分のお店を持ちたいと思った。

学校を卒業し、東京で修業して23才の時、相模原に来て、最初は下九沢で仮店舗をやっていたんですが、2年後にここ（弥栄）で店を持つようになって。23才で独立したというのは自分では頑張ってきたかなと思っています。

滝：理容師という仕事の醍醐味は？

佐藤：人って、頭の形・髪の毛の生え方一人ずつ全部違う。これは大変だけど面白みがある。だから、その人に合った髪型をつくれる。そしてお客さんは私に任せてくれる。それが面白いと言えば面白い。

お客さんにも満足してもらって最後「ああ、さっぱりした」と言って、皆さん帰られますから、そういう時は本当に、自分も満足かなという感じですね。

滝：大変なところは？

佐藤：大変なのは、さっきも言ったように、一人一人、頭の形も髪の毛の生え方も違うから、それを考えてお客さんに似合ったようにカットしなければならない。それは大変ですよ。中には「こうしてくれ、ああしてくれ」という人もいますが、そういう人に限って、その頭に似合わない。そういう方もいらっしゃいます。そんな時は、たとえば「あなたの髪の毛は、横側が前を向いて生えているから逆に後ろが立ち

やいますよ」と説明して、お客さんに納得してもらってカットする。そういう事が大変。

滝：趣味は？

佐藤：ビートルズの似顔絵が壁に飾ってありますが、これは私が中学の頃。それまでは歌謡曲ばかり聞いていたんですけど、ビートルズという音楽が入ってきた時は衝撃を受けたのかな。それから本当にビートルズが好きになり、今でも車の中では必ずビートルズをかけています（ドライブの時もどこに行く時も）。たまに、お店でもビートルズをずっとかけている時もあります。ただ、ビートルズをかけていると、天気やニュースが分かりませんから、今はFM横浜を流しています。

あとは植木かな。土をいじっている時は、なにも考えないで済むから、花とかを育てるのが好きですね。新芽が出てきて、どうしても捨てられない物は、お客さんにあげて喜ばれたり、そんなのが嬉しいのかな。

滝：これからの夢は？

佐藤：夢というよりも自分の願望ですけど、自分が元気なうちは、お客さんの髪の毛をやって、お客さんが喜ぶ顔を見て、できる限り元気で頑張れたらと思っています。

滝：ここのお店は何年前からやっているんですか？

佐藤：昭和50年。だから45年になりますね。

滝：奥様は、どうなされたんですか？

佐藤：うちのは、2年前に亡くなったんです。ガンで5年の闘病生活を頑張ったんですが、68才で。元々、頑張り屋でガンにもすごく頑張ったんですけど、やっぱり最後は散っちゃいましたね残念なことに。理容学校も一緒なんですよ。だから十代の頃からずっと。私にとっては、戦友でもあったし、友達だったり、恋人だったり、時にはお母さんだったり。最高の女房でしたね。



写真撮影のために、マスクをはずして頂きました。

それにしても、おじさん恰好いいな

【滝から】

今回の「極み」はいつもよりも「技」というものに焦点を当てたいと思った。身近に技を感じられるのはなんだろうと思ったら床屋だった。いつも通っているお店に頼んでみたら「本部からの許可がおりない」と断られてしまった。本誌にとって「極み」は柱。これは困ったと思った。翌朝、目覚めた瞬間ひらめいた、「オレが20代の終わりに通っていた床屋さんに頼んでみよう」と。ネットで調べたら、そのお店の外観の写真だけは出てくるのだが情報がなんにも載ってない。「これは辞めてしまったかもしれない」と思いながら、とにかく行ってみた。そしたらおじさんがいて話を聞いてくれ、取材もOKに。

3年ぶりに顔を出したのだが、いつもいるはずのおばさんがいない。「きっと、なにかの用事で、たまたまいなかっただけだろう」と思い、取材へ。

おじさんは話を上手にまとめながら取材に応じてくれた。最後の話にはびっくりさせられ、ウルツと来た。

帰り道、同行の人と「きっと、仲がいいご夫婦だっただろうね」と話しながら帰った。



【写真撮影に伺った時に、
こんなちょっといい話を聞いてきました】

最近、〇〇屋というのがなくなってきている。「八百屋」とか「魚屋」とか「床屋」とかとか「屋」が付くものがなくなってきている。それは大型スーパーが発達しているから、私達の仕事が厳しくなっている。

「後継ぎはいないんですか」

いなくて良かった。だけど、娘が動物好きで、この家の奥でトリミングをやっているんだ。大きなペットショップは、何匹も一緒にカットするから犬が落ち着かないけれどウチは一匹ずつだから犬が落ち着いてトリミング出来るんだ。

名盤探検隊⑤ 荒井由実「ひこうき雲」(73年11月発売)

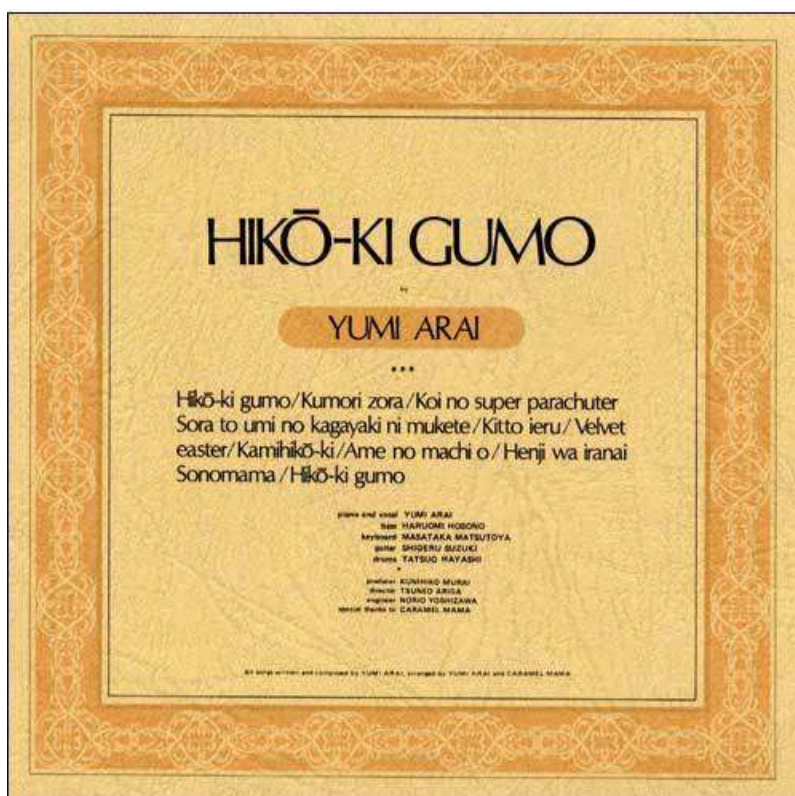
滝はユーミンが好きだ。自分のパソコンの中を見てみるとユーミンのアルバムが一番多く入っている。

なにを取り上げようか迷った。中学の頃初めてリアルタイムで聞いた「パールピアス」も夏の夕方に聞くとピッタリで好きだ。だが今回はユーミンのキャリアが始まったアルバム「ひこうき雲」にする事にした。

去年の12月に、39枚目のアルバム「深海の街」をリリースしたユーミン。そのファーストアルバムはどんな作品だっただろうか。

今、何回も繰り返し聞きながら、この原稿を書いているのだが、全く飽きない。本当にこれが約半世紀前のサウンドなのだろうか。改めてクレジットを見ると腰が抜けた。そこには細野晴臣、鈴木茂。日本ポップスをつくってきた人達だ。周りの大人達は当時19才のユーミンに、なにを託したかったのだろうか。そして、このLPをその時、手にした人達は、どうだったのだろうか。73年と言えば、四畳半フォークかアイドルの全盛期だった頃、そんな中こんな鮮麗されたサウンドがどのように受け入れられたのだろうか。

この中で、滝が一番好きなのは、「返事はいらぬ」。これはユーミンのデビュー曲だが、アルバムではリミックスされている。これが本当にかっこいい。色褪せないというのはこの事をいうのだろう。



編集後記

ゴールデンウィークも終わり、窓から見える風景は若葉一色で眩しいほど、これから夏に向けて太陽の恵みが（肌に）痛いほど感じられる季節がやってくる。

一方、コロナは全く落ち着く気配も感じられない。ワクチン接種も、いつ我々に行き渡ってくるのか全く分からない。テレビを観ていると「この国はどうなってしまうのだろうか」と思ってしまう。そんな中でも、今のところオリンピック中止の報道は全くない。いったい、誰のために、なんのために、今の状況の中で開催するのか本当に分からない。感染爆発せずにアスリートも国民も笑顔で終わればいいのだが。

最近の冷凍食品は本当においしい。この間テレビでやっていた冷凍のお好み焼きを買ってみて、連休のあいだ毎日食べていた。フワフワなホットプレートで焼いたのと変わらないお好み焼き。この連休は幸せだった。また「美味な話」に出てきた今川焼も買ってみた。安価で大きさも普通で食べてみたらおいしくてハマってしまった。父親の事を初めて書いてみたのだが甘い物が好きで夜になると、おふくろが焼いたクッキーが入ったタッパを嬉しそうに抱えて食べている、そんな姿が浮かんできた。やっぱり家族って思い出があるんだなあと思った。

「THE極み」に協力してくださった、とこやショップシュガーの佐藤さん。取材の寸前まで「あとから書面で答えるから」と言っていたのに、滝が「とりあえずやってみましょう」と言いレコーダーのスイッチを入れたら、話をうまくまとめて下さり、良い記事を作る事が出来ました。本当にありがとうございました。

これから、どうなっていくか分からない地球という星。

とにかく一日一日を自分らしく精一杯生きていきましょう。

発行所

〒252-2042 神奈川県相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝英史

MAIL nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 042(755)9105

発行協力

社会福祉法人アトリエ 一から百まで堂

〒252-0235 神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5

振込先

フク)アトリエ

ゆうちょ銀行 ○九八(098)店

普通 1208349

記号番号 10960-12083491